現代日本キリスト教文学全集 12 「信頼と連帯」

定価1200円

著者 遠藤周作・椎名麟三・島尾敏雄

発行者 武藤富男

発行所 株式会社 教文館
一〇四・東京都中央区銀座四―五―一
振替・東京一一三五七・電(五六一)八四四六

印刷所 伸光印刷株式会社

昭和四八年一二月一五日 初版発行

乱丁・落丁はお取り替えいたします

© 1973

配給元 日キ販 東京都新宿区新小川町3―1 振替・東京60976
電話 (260) 5664 (代)

0393―625120―6100 (日キ販)

信頼と連帯

現代日本キリスト教文学全集

12

教文館

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

わたしが・棄てた・女……遠藤周作……五
媒妁人……椎名麟三……一六五
徳之島航海記……島尾敏雄……二〇七
解説……笠原芳光……二四三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　熊谷博人

わたしが・棄てた・女

遠藤周作

ぼくの手記　㈠

男やもめに蛆がわく……

むかしから言われてきた言葉だが、慎みぶかい読者姉妹はまさか、若い青年二人の下宿を、のぞかれたことはありますまい。彼等がいかに物ぐさで、その住む部屋がいかに乱雑で、臭気にみちているかをじかにかいで見たこともありますまい。

しかし、貴女にもし、遊学されている愛すべき兄弟、恋人がおありなら、ある日、突然、その下宿を奇襲されることをお奨めしましょう。襖をあけられた途端、あなたは、「まア。いやッ。」

顔をあからめ、絶句なさるにちがいない。

この物語は、戦争が終って三年後の二人の若者の下宿からはじまるのだが、女性の読者を多少、辟易させる部分が出てきたとしても、それは必ずしも、こちらの罪ではない。当時、長島繁男とぼくこと吉岡努は、独身の学生だったのである。二人が共同生活を営んだ神田の下宿は、さすがに蛆まではわかなかったが、夏には自慢できるほどノミがピョン、ピョン飛んでいた。神田の焼けあとや復興したばかりのバラックがみおろせるこの六畳は、それでも下宿難のあの時代に、敷金不要、権利金いらずで、見つけるに随分、苦心したものだった。

友人、長島繁男は名前だけでは当今の有名な野球選手を連想させるけれども、あのように逞しく、タフで、イカす青年を想像されては困る。彼が裸になると薄い胸に肋骨が哀れに浮きだすのは食糧難の学生生活のせいで、長い間雑炊やスケソウダラしか食べさせられなかったためである。それから、ぼくの場合はもっと悪かった。ぼくは子供の時、軽い小児麻痺をわずらったから、痩せている上に、右足が少し不自由だった。

二人とも学校にはあまり顔を出さなかった。戦後の田舎の事情で親の仕送りもほとんど当にはできず、仕方なくアルバイトに忙しいというのが当時、大半の学生の生活だっ

たが、我々もその例にもれなかった。アルバイトと言っても眼から鼻にぬけるような現在の学生がバンド演奏や学生重役で二万、三万とかせぐのとは違って、やっと出まわりだした電気製品やアルミ鍋を問屋から小売店に配達したり、宝くじやアイス・キャンデーを競輪場や海岸で売ったり、まあ、頭の角帽とはあまり似つかわしくない仕事が、ぼくらのアルバイトだったのである。

（ゼニコがほしい、オナゴがほしい。）

いささか下品な文句で恐縮だが、これがぼくと長島との当時の心情だったと言ってよいだろう。ゼニコ――つまり金はないのは勿論だったが、戦後、靴下と共に一番、早く強くなったと言う若い女性は、素寒貧のバイト学生など鼻にもひっかけてくれなかったのである。

「ゼニコがほしいなあ。オナゴと遊びたいなあ。」

アルバイトのない日は、ぼくも長島も綿のはみ出た万年床でマスクをかけて寝そべり、そんな溜息をもらしていた。マスクをかけているのは別に風邪を引いたわけではなく、一ヵ月も掃除をしたことのない部屋は、一寸でも動くとホコリが布団の間から煙のように巻きあがるのだ。だから物ぐさな我々には、マスクをする必要があったわけである。

あれは、秋晴れの、やけに美しい日差しが、ひびの入った窓からこれだけは豊かに流れこんでくる午後のことだった。どこかの遠い家のラジオで笠置シヅ子の歌うブギウギがはっきりと聞えてくるほど、空気は澄んでいた。万年床の上であぐらをかきながら、二人は電熱器でこしらえたイモ雑炊をすすっていたが、雑炊のあまい匂いが、万年床からただよう臭気とまじると、ふしぎに、母親の匂いをぼくに連想させた。空をくりぬいたような秋晴れの青さとこの匂いとは、人を感傷的にさせるものだ。

「おいおい。……それ、食わんのならこちらに寄こさんかい。」

うどん屋からガメてきたドンブリを口にあてた長島は、物ほしげな眼でぼくの顔をみつめた。

「ばっけヤロ。さっきから二匙も余計についだくせに。」

「うむ。何時までもこんな生活をしていてはいかんなア。身も心も……よごれていくような気がする。」

長島は意外にセンチなところがあって、この時もこんな話を急にしはじめた。

小さい頃、彼は山梨県に住んだそうだが、あの山国では

秋になると葡萄つみがはじまる。棚にみのった葡萄の房が陽の光をうけて褐色の宝石のようにキラキラと光り、菅笠をかぶって脚半をはいた娘たちが手籠に葡萄を入れていくのだそうだ。

「娘たちは背のびをして葡萄棚に手をのばしよる。俺あ、そのころ子供だったがね。若い娘たちが背のびするたびに、着物の裾と脚半との間にのぞき見える真白い膝小僧をうつくしいなァ、そう感じたもんだ。秋になると……なぜかいつもその時の膝小僧の白さを思いだす。」

箸を動かしながら、長島は、もう一度当時を心に甦らせているようだったが、ぼくの眼にも、着物と黒い脚半との間に真白な膝をのぞかせながら、秋の陽の下で背をのばし葡萄をつんでいるピチピチした娘たちの姿がみえるようだった。そういう若い娘と一度でも葡萄つみができたら、どんなに幸福であろうか。

「やッ。いけねえ。バイトの時間だ。」長島は夢からわびしい現実に戻って、「娘よりもまず、金という毎日を忘れとったよ。」

あわてて立ちあがると彼は、油でにしめたような丹前をぬぎ捨てて、押入れにしまったただ一つの古行李に手をつっこんだ。

「きたないなあ。」

犬が土をほじくるように次々とうすよごれたシャツやパンツを放りだして、

「あれェ。ましなのは一つもないのかい。お前あ、風呂屋に行っても体を洗わないからいけないな。」

実はぼくも長島も、この古行李のなかによごれものを放りこんでおく。共同生活の最初の頃は流石に自分は自分の下着を着用していたのだが、いつの間にかぼくのシャツが彼のシャツとなり、彼のサルマタがぼくのサルマタとなってしまった。その上、物ぐさな我々は、洗濯の手かずを省くため、一ヵ月も洗わぬ下着の山から、まだ、よごれのめだたぬものを次々とえりだして着るという悪習慣がついている。(読者よ。顔をしかめないで頂きたい。だから、ぼくはさきほど言ったのである。ぼくたちだけでなく、あなたの御兄弟、恋人も……要するに男なんて一人暮しの時は、ほぼ、これとおなじことをやっておるのだ……)

長島と、薄陽のあたる御茶ノ水駅前の雑踏のなかで別れた。彼はこれからあるお屋敷町の邸宅に、犬の散歩という

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

仕事をやりにいくのである。犬といっても馬鹿にはならない。長島の話によると、その邸で飼っているポインター犬は、バタやミルクの入った豪勢な食事をあてがわれているそうだ。戦後の日本人でも、持っている人はやはり、持っている。

ぼくは駿河台をおりて全国学生援護協会の事務所まで出かけた。事務所といえばきこえはいいが、バラック建ての小さな建物に学生たちがひっきりなしに出たり入ったりする場所である。しかし、この小さな事務所でぼくたちは安直な下宿を世話してもらったり、あたらしいアルバイトを手に入れる。

事務所の前には、秋の弱い日ざしをあびてぼくと同じように頬のこけおちた学生たちが並んでいた。まだ復員服をきて角帽をかむっている男、ボロボロの背広を着た男もみな学生なのだった。

列に入って事務所の壁にはりつけてあるバイトの仕事案内を見あげる。宮城前と芝浦で芝生のゴミ集め。これは賃金はいいがむかし小児麻痺にかかったぼくには、なかなか辛い仕事だった。宝くじ売りは労力のわりに金が入ってこないし、家庭教師の口はほとんど東大や一橋のような優秀大学の奴等に占領されてしまう。

思わず溜息をついた時、案内表の右端にちょっと目だたぬ形ではりつけてある小さな紙が目に入った。学生の申込みがあった紙には、係員が次々と朱筆で斜線を入れるのだが、これにはまだ赤インキはついてはいなかった。

千葉県　桜町にて広告くばり及び軽労働、日当賃金・二百円　交通費別

おそらくこの紙を他の学生も目につけたのだろうが、千葉県まで出かけると言う点で敬遠されたにちがいない。コッペパンやイモ雑炊で凹んだ腹には、千葉県の遠い田舎町までバイトに出かけるのは流石に億劫なのである。

（行くか、行かないか。）

ぼくはポケットに入った小さなサイコロを手の中にころがしてみた。何か決心がつきかねる時、いつもこのサイコロにたよる。戦後の学生としてぼくも自分の運命を自分の意志ではなく、外発的な偶然にまかせる荒れた気持と諦めがあった。サイコロの目は偶数と出たので、ぼくは事務の窓に首を入れた。

「ああ、これか。これはと……」

中年の係員は古びたペンを耳にはさんでカードをくっ

た。
「スワン興業社、神田神保町三丁目の……こりゃア、あんまりまじめな会社じゃ、ないかもしれんよ。」
「ははあ……まじめな会社でもふざけた会社でも良いんです。」
中年係員は一寸苦笑して、黙ったまま雇用主にわたす勤務表の書類を渡してくれた。
神保町三丁目は歩いて十五分とかからない。この一画はやや戦災をまぬがれたのか、ふるびた家が一握りほどの場所に残っている。こわれた板塀の間から夕食を支度しているのか、薪をおったり七輪に火をつけている音がきこえ、ぼくの横を紙芝居の親爺がのろのろと自転車をこいで通っていった。
「スワン興業社は何処でしょうか。」
子供をおぶって家の前にたっている中年のおばさんにたずねると、
「ワン興業だって。」
「ワンじゃない。スワンです。英語で白鳥って意味でしょう。」
「そんなの、この近くにあったかねえ。……十七番地なら、たしか、この裏のはずだけど……」
ぼくはまた七輪の煙がながれ、暗くなりだした路を紙芝居の親爺の自転車のあとからついていった。親爺は横町に折れ、一寸みると不動産屋のような一軒のきたない平家の前で自転車を軋らせながらとまった。
その家がスワン興業社だった。こちらはこちらでスワン（白鳥）という名から白い洋館などを想いうかべていたのだが、白鳥どころか、ゴミ溜から這いでた小鳥のようにホコリでうすよごれた家だった。たてつけの悪い硝子戸をあける。土間に電話をおいた机が一つ、その机にオカッパ頭の眼鏡をかけた男が、進駐軍の流れものらしい原色のズボンをはいた足をのせ、こちらを見た。
「金さん、金さん、物品はここにおきますで。」
紙芝居の親爺は自転車から運んできた商売用の絵を土間において、相手を金さんと呼んだ。どうやら、このオカッパ頭は、戦後、東京に進出してきた第三国人の人らしい。
「ヨシ、ヨシ。あした、また来るか。」
親爺はうなずくと硝子戸をガタピシいわせながら出ていった。オカッパ頭は鼻の穴に指を入れて中をかきまわしながら、

「それて、君は、なにかね。」
「実あ、アルバイトの広告を拝見したものですから。学生です。これが学生証です。」
「よし、わかた。君はカクセイ組合からきたのたろ。」
「学生援護協会です。」
「よし、よし、しことは、広告くぱりた。やるか。」
「やります。広告くぱりでしょう。」
相手の発音にまきこまれて、こちらの日本語まで変になりそうだった。
「広告はそれた。」
大きな金色の指輪をはめた指で、金さんがさした方向は土間の片隅においてあるポスターとチラシの束だった。このポスターとチラシの束を、明日、千葉県の桜町やその郊外の村々にはったり配って歩くというのが、ぼくの仕事らしい。一枚もらって、ぼくは今日と明日との交通費百円をポケットに入れ、スワン興業社を出た。豆腐屋のラッパがどこかできこえ、みじめでわびしい気持だった。長島が今日雑炊をくいながら、身も心もよごれていくような気がすると言ったが、その言葉が急に心に甦ってきた。路を歩きながらチラシをみると、謄写版のインキでよごれた紙に下手糞な筆跡で、
「浅草の人気者、エノケンが歌う懐しの名曲　東京のエケン、遂に桜町に出演」
と書いてある。

エノケンといえば、三歳の子供だって知っている。映画や演劇で活躍している喜劇界の第一人者なら当然、六大都市の一流劇場で出演の契約があるにちがいない。いくら何でも千葉県の泥くさい田舎町に旅興行をうつとはまず考えられないことだ。
それに……まかり間違って何かの慈善興業で片田舎で出演するとしても、その興行をスワン興業などというあのあやしげな事務所に委せる筈はあるまい。
（こりゃア、インチキにちげえねえぞ。）
ぼくはあの学生援護協会の頭にもう白いものの混じりだした中年の係員が、
「あんまり真面目な会社ではないかもしれん……」
と呟いたのを思いだした。
しかし真面目な会社だろうが、ふざけた会社だろうが、今のぼくには同じことだった。あのビラを桜町でまく仕事

をやれば二百円のほかに交通費をもらえる。こちらにとってはそれで充分なのである。神田の鈴蘭通りで、あのオカッパ頭の第三国人からもらった金で久しぶりにおデンと茶飯をくらうと下宿に戻った。長島は何処をほっつき歩いているのか、まだ帰ってこない。体臭のしみこんだ布団にもぐりこんでぼくはねむれぬ儘に、彼が話した葡萄つみの娘たちのことをぼんやり思いうかべる。秋の陽の下で彼女たちの白い膝小僧は若いぼくの心に泉のようにしみるのだ。

翌朝十時ごろ、痩せたロースト・チキンのような恰好で眠っている長島をそのままにして、ぼくは古いレインコートを着ると下宿を出た。

「なんた。元気ないな。タイチョプか。」

オカッパ頭の金さんは、昨日と同じように大きな指輪をはめた指でチラシの束をさすと、

「それ、リュックにかついてな。この紙にかいてあるとこ、廻ってくるか。」

桜町は市川からバスで一時間ほどのところらしい。その町の周辺の三つか、四つかの村を、チラシをまきながらまわるというのが仕事だった。これは相当な労働だ。二百円の日当ではひきあわぬと気づいたが、もうあとの祭だった。

「そりゃそうと……」ぼくは一寸戸惑ったが、やはり、口に出した。「このチラシに書いてあることは本当なんですか。」

「ははア……ウソ思うか。」

細長い眼でぼくをチラッと見ると、金さんはうすら笑いを骨のとびでた頬にうかべた。それ以上、何もきく必要はあるまい。

「じゃア……」

「チョと、まて。」

こちらを丸めるつもりか、それとも憐れなバイト学生に仏心を起したのか、金さんは原色のズボンのポケットからラッキー・ストライクをだしてくれた。これもその着ている洋服と同様、どうやら進駐軍からの闇物資にちがいあるまい。

たかがポスターとチラシと思って馬鹿にしたが、貸してもらったリュックは案外と背中に重い。小児麻痺を患った身には、こういう荷を背負うのは苦手である。御茶ノ水から、千葉にむかう国電は流石にこの時刻はすいているが、リュックをもったぼくは芋の買出しにみられたであろう。そう言えば、同じように風呂敷包や古リュックをかついだ

カツギ屋の連中が前の車に五、六人、乗りこんでいる。

市川の駅からバスに乗ると、長いバス道路がすぐ続いた。バス道路に一本、大きな松がそびえている。天然記念物の市川の松である。その横に映画館の看板がみえ、ペンキで池部良の顔が大きく描いてあった。バスはやがて左に折れ、街を離れるにしたがって、次第にゆれはじめる。欅や樫の林は今、秋の気配をいっぱいに匂わしていた。栗は褐色に枯れて生気がなかったが、大樹の葉々は陽の光にかがやき、その落葉は金貨のように道にも農家の屋根にもふっている。

畠の土の色は黒い。落葉は農家の藁ぶき屋根にも赤い色彩を与えている。その農家の庭には柿の実が眼にしみるほど美しかった。桜町があと二つという停留所をぼくは口紅をやけに大きくつけた女車掌からきいて、バスを飛びおりた。

ポスターをはったり、チラシをまいた仕事は、昨年、選挙のバイトでやったことがある。ぼくは学生の多くがそうであるように革新派の政見に共鳴していたが、思想とバイトは別である。どこかの土建屋あがりの保守党候補者というのが、ぼくの手伝った相手だが、その時はこの男の写真入りのポスターを渋谷や三軒茶屋の電柱にはってもべつに照れ臭いとは思わなかった。それなのに、今、角帽をかぶってリュックの口をひらき、このノドカな農家の郵便受けや縁側に、あやしげなチラシを投げ入れていると後めたい気がしてきたのである。

家中で畠に出ているのか、どの農家も人影がない。コ、コ、コと鶏が鳴き、ぼくの足音にあわてて、縁側に走りあがる。その庭に表紙のちぎれた古雑誌がおちている。なんということなしにぼくは拾いあげてパラパラと頁をめくってみた。映画の人気スターや流行歌手の写真やゴシップを満載した「明るい星」という雑誌である。こんなに庭で雨ざらしにしているなら、屑屋にでも売るつもりだろう、そう思ったから何気なしにレインコートのポケットに入れた。帰りのバスで退屈しのぎに見るつもりだったのだ。

白い田舎路を学校がえりらしい坊主が二人通っていく。手に虫のついた枝を持っている。

「なんの虫だ。」

とたずねると、

「知らねのけ。シャクトリムシだべ。」

「どうだ。この広告、よめるかね。」

悪戯半分にチラシを十枚ほどつかんで呉れてやると、子供たちは、

「エ・ノ・ケ・ン……あッ、エノケンだ。」

「そうだ。知っているのか。」

「ずっと前、父ちゃんに映画につれてってもらっただ。したら、面白かったな。ふん、エノケンだった。……でもよ、ありァ、なんという題だっけかな。」

「そのエノケンが桜町に来るのさ。」ぼくは笑って、「お前、その青ッぱなをかめよ。そして兄ちゃんの頼みきかないか。」

「なんだね。」と一人がもう一人の顔をみて、「そりゃ話によるよ、なあ。」

「実はね、このポスターを学校や村の役場の壁にはりつけてもらいたいんだがな。」

ぼくの思いつきはうまく運び、こうして三枚のポスターとかなりのチラシを、この村でまくことができた。

次の村でもぼくは同じ方法を使った。子供たちは悦んで協力してくれるし、こちらは労力がはぶける。一番、手数のかかったのは桜町だが、ここに来た時はポスターもチラシも残り少くなっていた。ずっしりと重かったリュックもぼくのお腹と同じように凹んできたのである。

東京に戻るともう真暗だった。スワン興業社にリュックを戻しに寄ると、オカッパ頭の金さんは相変らず、冷えた机に足をなげだして、指で鼻糞をほじくっていた。

「ははァ、仕事やてきたか。」

「やてきました。」

金さんと話していると、こちらもどうも舌がまわらない。

「こくろ……こくろ。」

こくろというのは御苦労という意味だろう。引出しから大きな皮の財布をだして、一、二、三、四と十円札を二十枚、かぞえると、

「むたつかい、するな。しかし、君、けんき無いな。」

「そうですか。」

「うん、とうも、けんき無い。オンナにふられたか。」

「ふられたんじゃ、ありません。女性にめぐまれないんです。」

どうせ、オカッパ頭のこの第三国人に打明けたところで仕方がないが、ぼくはなぜか金さんに好感を持っていた。もっとも彼と親しくなっておけば今後もバイトにありつけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com